

第 50 回大阪府学校教育審議会 概要

1 日時 令和 6 年 4 月 3 0 日（火） 10 時 00 分から 11 時 50 分

2 場所 ホテルアウィーナ大阪 3 階 信貴 （大阪府大阪市天王寺区石ヶ辻町 19 番 12 号）

3 出席委員

氏名	職名	分野	備考
浅野 良一	環太平洋大学 教授	教育学	会長
池田 佳子	関西大学 教授	日本語教育、 国際教育	オンライン出席
大継 章嘉	大阪教育大学 学長補佐 特任教授	教育学、 教育行政	
小田 浩伸	大阪大谷大学 教授	特別支援教育	会長代理
川田 裕	学校法人常翔学園 理事	工学	
小酒井 正和	玉川大学 教授	ICT	オンライン出席

4 審議会概要

(1) 開会

- 開会にあたり、教育長よりあいさつ。

(2) 審議「入学者選抜制度改革について」

○事務局より、資料「第 50 回大阪府学校教育審議会資料」に沿って説明。

○説明内容を踏まえた、委員からの意見聴取に先立ち、浅野会長の指示により、事務局より欠席委員の意見を紹介。

< 明石委員意見 | 代読 >

- ・生徒側の観点と高校側の観点、高校の入学に向けての準備期間として論点をわかりやすく整理いただき、感謝。
- ・公立高校の役割は大きいと思っている。公立高校は、通学の利便性や地元地域の学校といった身近な教育機関であり、子どもたちの就学保障という教育のセーフティーネットとして大きな役割を担っている。そうした意味で、受験生・高校の相互の観点から今後の選抜制度の在り方を検討することは、時機を得た改革であると思う。
- ・現役の高校生の活き活きとした姿が中学生に与える影響は大きい。近年、大学でもオープンキャンパスに力を入れており、在学生と高校生とが交流することで大学生活のイメージを膨らませたり、大学の模擬授業を受ける機会を設けることで進学意欲を高めたりしている。高校生が

キャンパスの近くを通るときに見る大学生の姿も入学動機に大きく影響している。憧れを持つことは子どもを成長させると思う。例えば、中学生と府立高校生が参加・交流するなど、「中学生が高校を知ること、体験すること」をさらに充実させる等、「この高校に行きたい」と思うきっかけになる仕組みづくりが大切と思う。

- ・前回の審議会でもお話しさせていただいたが、問題意識の1つとして、より生徒の個性化や複雑化・多様化に応じていく選抜制度のあり方を考えていく上で、学校現場が負担を感じるような選抜制度では、働き方改革に逆行してしまうと思っている。2つめは、受験期間中に在校生の指導をどうするのかという観点も重要なことであると思う。府立高校の特色や魅力を打ち出すためには、高校の教育環境を含めた充実を図る必要がある、その中には先生方の処遇改善などの諸条件を整えることも必要という課題意識がある。
- ・また、中学生や保護者は「受験を早く終わらせたい」や「私学専願だと合格最低点が低く、合格しやすいので受験する」といった声も聞く。公立高校の受験日程の時期や複数の受験機会、特色ある入試に柔軟性を持たせることなども検討するべきものにとらえている。今後、ゲストスピーカーの方からのご意見等も踏まえながら、引き続き議論を続ける必要があると考えている。

<有明委員意見 | 代読>

- ・資料をまとめていただき、感謝。
- ・今回の選抜制度の変更について、理念や方向性は理解できた。概ね方向性には賛成だが、少し気になる点として、選抜制度の変更は何を目的にしているかをさらに具体化する必要があると感じているところ。お示しいただいた資料の議論で行くと、受験生と高校とのマッチングを高めていくということと、受験生が高校入学後により良い学校生活を過ごせるための準備期間を設けるということの2点が目的であった。
- ・このマッチングを高めていくという言葉はとてもきれいに聞こえるが、本当にこの議論が正しい方向性なのかの判断が難しい。具体的には、マッチングを高める検討と、選抜の方向性の検討の2つを同時に議論して、同時に解決につながるのかが難しい。この選抜の議論を尽くした先に、マッチングが高まる結果につながっていくのかの判断が難しい。
- ・まず、マッチングを高めるのであれば企業の就職活動で使われているようなアプリのようなもので、受験生の興味がある事柄と高校の強みがつながるようなものを導入すればよいと思う。今の受験生と高校との mismatch とまでいかないにしろ、マッチングが高まっていかない背景をどう分析するのが重要になってくると思う。
- ・その背景として、高校からの情報発信方法や時期、内容などを高校側が検討をすることも考えられるが、選抜制度を変更することでどの程度解消できるのか、私は教育の専門家ではないので判断が難しい。選抜制度の変更については、変更の具体例や、たたき案のようなものを提示いただいた方がより深い意見交換につながっていくと思う。
- ・次回はゲストスピーカーからお話を伺える予定と聞いている。ゲストスピーカーの方々の意見も踏まえた改善例をお示しいただくことが、より深い議論につなげることができるようになると思う。

<小原委員意見 | 代読>

- ・資料の整理をいただき、感謝。論点とされているところで意見を申し上げる。
- ・入試の改善で、受験生の学びたいことと、高校の特色とのマッチングを高めていくことは重要で、少しの変化を加えるだけでも、大きな効果を出すこともあると思う。大学入試においても感じるのだが、例えば、5教科の点数に傾斜をつけるだけでも高校の特徴を出せる（何が得意な学生を欲しいかを示せる）と思う。学校ごとに追加で何らかの試験を課したいという意向があるならば、それを認めることでさらに特徴を出せるかもしれない。
- ・公立学校の、専門的な学科、例えば英語を特に力入れる学校や部活に力を入れている学校などが選抜も含めどれだけ重点的に力を入れたとしても、費用や環境等踏まえたときに、私立高校に勝てるのかが疑問に感じる部分もある。
- ・また、普通科には、普通科の良さがあり、自分の強みや好きなことが分かっていない子どもが自身と同じような子どもたちと中庸的に学習し、強みや好きなことを探していくことができる。そういった学校もあることが公立の意義ではないか。学校説明会やHPなどで学校が力を入れていることをアピールすることには公立学校はもっと力を入れるべきだ（今のままでは受験生やその家族、学校に伝わっていない）と感じるが、入試によって特徴を出させ、マッチングを高めるのは難しいのではないか。改革が高校の負担を増加させ、子どもや家族、中学校に、選ばれなかった理由について疑問を持たせ、不透明感・不安感を募らせるならば、マッチングの向上につながらないどころの問題ではなくなるだろう。
- ・採点基準をそろえるために、マークシートを利用するということは、公平性を保つという面ではいいと思っている。逆に記述や自己表現に関しての採点基準をそろえることの難しさもある。テクノロジーを活用した記述採点も、公平性や速さ、採点教員の負担減という意味では悪くないのではないか。
- ・3つ目の論点については、大阪は時間がない中で選抜や、高校生活の準備を実施しているのは明らかであり、前倒しをして1つ目の論点や2つ目の論点に反映することが望ましい。今より、早く合格者が決定したら、プレ入学のようなことができる学校があれば、その学校の良さにもつながるので、選抜の前倒しも良い影響はあると考える。

<巽委員意見 | 代読>

- ・前回の審議会でも申し上げたが、私は今、公立の小・中学校のスクールカウンセラー スーパーバイザーをしている。臨床心理士の視点から選抜の検討に関してご意見を申し上げる。
- ・検討の方向性や理念について、事務局が整理いただいていた内容に賛同するが懸念することが数点ある。
- ・まず、生徒が自身の個性や才能を発揮できる選抜について、広島県で取組みがなされているような「主体的に自己を表現する」ことは、高校が求める生徒像として「自己表現や言語表現ができる生徒」とあれば魅力的な方法である。一方で、中学校のSCの立場から見ると、発達特性のある子どもたちにとってはそれが極端に苦手であったり、当日緊張したりするなど、大きな心理的負担になるのではないかと心配する。
- ・また、愛知県や広島県のように選抜機会が1本化するとなれば、1回のテストだけで決まるということも不安の高い生徒にはさらに心理的負担につながる可能性があるだろう。

- ・現在、大学等においても対話的な授業やアクティブラーニングが盛んになっている。そういった学びが必要であると認識しているが、一定の生徒達にはそれ自体がストレスになり、学校選択に影響したり、入学後の学校生活で苦労している学生もいる。
- ・特に、コロナ禍の数年間で対人的な関係も乏しくなった。コロナ禍で子ども達が失った経験というのは、我々大人が考えているよりもずっと子ども達の発達に影響していると感じる。選抜の時点で自己表現が必要になったり、入学後の学校生活や学習活動で対話的なグループワークなどを強く求められたりすると苦しい子どもたちも出てくる。失った、或いは十分に詰めなかった経験は、入学後にそれぞれの学校現場で経験ができるような様々な取り組みを用意する事も必要だろう。
- ・発達特性のある子どもたちやその保護者は、学校を選択するにあたって、高校入学後のサポートについても不安を感じるだろう。教育相談や学習支援等、生徒支援の充実と発信があれば、安心した学校選択につながる。
- ・選抜を経ることで精神的に成長する受験生もいる一方、選抜で苦しむ生徒も少なからずいる。受験に対する安心感に加え、入学後の高校生活に対する安心感の両方について、制度の充実と情報発信をしていただきたい。

○浅野会長の指名により、出席委員が発言。

<池田委員>

- ・事務局から詳しく情報をいただいたので、そこも含めながら、思うところを少し共有させていただく。先ほどの欠席委員の方々のご意見にも多少重なるところはあるかと思うがご容赦いただきたい。
- ・大きく分けると、2点ほどあるかと思う。1点めは、他県の事例で参考になる部分を大阪府の中に取り込んでいくかどうかを考えたときに、マークシートにはメリット・デメリットがたくさんあると思う。教職員の負担を考えて、というところが一番大きかったと思うが、各高校の受験者数、要はどれぐらいの受験者の回答を、これは筆記の場合もマークシートの場合もあると思うが、最大でどれぐらい、高校は処理しなければならないのか。つまり、負荷はどれぐらいなのかということは、現実的に導入を検討する際に大きな判断基準になってくるのではないかと思う。例えば、関西大学では非常に大人数の受験者なので、他の大学もそうだが、筆記のみ、例えば長文記述といったものが多かったりすると、採点に非常に負荷がかかってくるというのは否めないで、マークシートといったものに頼らざるを得ないという判断になるが、高校の場合だと、どれぐらいの負荷があるのかというところで判断があるのかなと思う。
- ・愛知県の場合はマークシートを導入したと言うが、特別選抜、それから面接をする・しないということを各高校に委ねるところで、マークシートのデメリットをうまく補っていくという形で対処されているかと思う。マークシートというのは大学でもよく感じることだが、空所の答えを覚えるという戦略的なテストストラテジーのような形での学習にならざるを得ないところが出てきてしまう。それが実際、中学生の受験準備をする過程の中で、本当に学んでほしいことなのかということにも繋がってくると思うので、その部分を検討していく必要があるかと思う。簡単に言いますと、マークシートを導入したとして、マークシートの問

題に何を盛り込むのか、どのようなものを盛り込めるのかというところの技術の発展も含めて、検討する必要があるだろうなと思った。それが一点め。

- ・2点めは、受験の時期について。早めに結論が出ているために、自分がどこの高校へ行くのかというのが早い段階でわかっている、この一つのメリットとして、引き継ぎの期間が生まれるということがあったと思う。一定の期間があると、様々な情報源ですとか、これから迎える環境に対して順応をしていくというような形の引き継ぎがあるかと思うが、この引き継ぎの中に、現状、どんな引き継ぎがなされているのか、また、今の大阪府内の高校の試験での引き継ぎの期間であれば、どんな引き継ぎの内容が漏れているのかの洗い直しができたらなと思う。より長い期間があれば、それだけ余裕があるわけで、高校と中学の間の期間で様々な引き継ぎができる。これも中学校の学生たちが進学していく上で、非常に重要な学びの期間だと私は見ているので、この部分の検討も、今後ヒアリングも含めてお話を伺いたいと考えている。以上2点が私からの意見。

<事務局：高等学校課>

- ・まず1点め、入学者選抜における教職員への負荷について。受験者数によって負荷は大きく変わるが、例えば、昨年度の選抜であれば、豊中高校564人、高津高校561人、茨木高校534人で、600人弱というようなところが受験者数の最大数。こうした生徒たちの5教科の試験を5営業日の間で採点して、点検して、合否を決定して、合格ボードを作る作業を行っている状況。基本は採点に一番時間がかかる。採点とそれから点検、ここにやっぱり時間をかけている。合否決定に関して、教育庁ではシステムを用意しているので、一定入力をすれば自動化されて、答えが出てくる。学校は学校で同じように独自のシステムも用意しており、2つのシステムで安全性を確認しているが、その作業に至るまでの採点結果の点検において、過去に失敗事例があったので、その反省をしっかりと受け止めて、点検に力を入れていることが、現状、負荷に繋がっているのかなと感じている。ボーダーゾーンの生徒については、全員分、文章を読む作業を行うので、やはり文章を読んで、その中でキラリと光る生徒を見出す作業については相当校長を中心として時間がかけられているものとは思う。けれども、やはり一番大きいのは採点そのものの作業ではないかと推察をしている。
- ・2点め、引き継ぎの具体的な内容であるが、合格発表が行われて、どんな生徒がやってくるかがわかると、正式な引き継ぎをもちろん行うが、それ以前にクラス編成を行うとか、そういった作業に入る前に、各中学校に高校が連絡をしたり訪問をしたりと、高校生活を行っていく上でそれぞれの子供たちがどんな配慮が必要なのか、高校として気にしておかなければいけないことは何かという観点で、中学校からメッセージを受け取るというような引き継ぎが今の大きな形になっている。一方で課題としては、そうした配慮の部分の引き継ぎは、中学校側も高校側も意識的に行っているかと思いますがけれども、得意なところ、ストロングポイントというか、この子は何かできるのかというプラスの面の要素というのは、引き継ぎの部分では後手になっているのではないかと、私としては感じているところ。

<小田委員>

- ・ある一定の配慮支援が必要な生徒については、一応引き継ぐ内容が明確になっていると思うが、引き継ぐかどうかの狭間になっている生徒、その生徒が一番、退学等に至る可能性が高いと感じている。そのところをどのように引き継いでいくか、進路変更や退学といったことを避けるためにも、その部分の生徒の引き継ぎをどのようにしていくのかが課題かなと私自身、今思っている。

<小酒井委員>

- ・まとめていただいてありがとうございます。非常に参考になった。
- ・今コメントいただいたことではあるが、そこから意見を始めさせていただく。中高接続については、現場の先生の本当の忙しさを把握することがすごく大事だと思っており、やはり今年も相当程度バタバタしていたと聞く。
- ・私が大学でやっている限りでも、念入りに配慮を必要とする方への対応は本当に検討事項も多く、受け入れ側の方ですごく時間をかけて検討する。やはり期間が絶対的に必要というところがある。個人で処理するものではなく、環境で対応しなければいけないというのが今の合理的配慮の考え方だろうし、その環境を整えるには受け入れ側に非常に時間がかかる。書類の1本で済むわけではないので、やはりその部分を考えて、現在の入試のタイミングについては、ちょっと早めた方がいいのかなというのが私個人の考え。
- ・その点以外でいくつか意見がある。今の府立高校が置かれている立場では、選ばれる府立高校を考えていかなければいけないと思う。かといって特色化だけに全振りすることは絶対に違うと思っていて、やはり従前の入試制度が合っている、あるいは従前のクラスでの学び方が合っている人たちが、実際ボリュームゾーンとして多くいるかもしれない。特色については、特色がないこともある意味特色だといった形で考え、その振り分けを全体的に考えて、私どもも検討しておくことが大事と思いました。
- ・現状、特別選抜と一般選抜といった形で専科などが特に特色を出せるようなことになるかもしれないが、そうとも限らず普通科の方もスクールミッションをちゃんと考えていければ、特色を出すこともあると思う。一律、画一的に考えるのではなくて、両方の側面で考えていく必要があると思う。特に専科の方だと昨今、大学の方でもですが、妙に職業人教育というか、社会人教育に世の中が振り過ぎていて、人格形成等といった教育の目的が吹っ飛んでしまうようなところがあるので、特色と言い過ぎると、結局教育の部分、人材育成ではなく教育の部分が吹っ飛んでしまうという危惧も、若干私はしている。例えば、音楽科のような文化を担う人間を育成するような学科は、やはり少子化になってくると相対的に少なくなってくるので、一律には扱えないかもしれない。けれども、その上で、めざしたい人がめざすといったマッチングは考えつつ、数が集まらないことがある意味当然な場合は少し違う扱いをするといった検討も必要になる。そのような必要性が、特色入試でも出てくるのかと思った。
- ・基本的には入試制度が多様になるか否かでいえば、先ほどの強みや特色を生かした多様な選抜方法が少し気になる。スクールミッションがあやふやだと、多分特色がないとなってしまう、より具体的に突き詰めていく学校はやはり理念だけではなくて、学び方を教えるなどのサービスの提供でも現場の先生が頑張っていると思える。このマッチングがうまくできてい

るからちゃんと育つといったシステムが動くようになり、そういう学校は非常に尊いと思う。そういう学校はある意味トップダウンで、こうあるべきだと、スクールミッションに対して現場の先生がどのように学び方を改革しているかがセットで作られているだろうし、逆にそこに馴染む人というか、学び方も含めて馴染む人を選抜できる入試といったところで、現場の先生方がどう学びの環境を整え、提供しているかといったことも踏まえて、特色ある入試といったものを作れるようにしてあげるといった余地も、そういう余白を残すといったようなことも私どもの方で検討していくべきではないかと考えた。

- ・他県の事例で、一本化するという議論もあるが、もちろん一本化のメリットも考えなきゃいけないが、かといってそこの方に突き進んでしまうのも結構怖いことだなとは思っている。相対化させて、両方きちんと検討した上で、議論を進めていく方がよいかと思った。特定の学校の種別によっては、やはり一本化してしまうと良くないといったこともあるかもしれないし、広く検討していくことが必要かと思った。
- ・逆にその特色化というか、個別の高校が何をやる高校なのかが際立ってくる部分が一部あるのだとすると、一本化でどう影響が出るかという検討をしていくことが重要だと思う。一方で、高校側の方もスクールミッションをちゃんと考えていくことをアドミッションポリシーも含めてちゃんと情報発信するという、ただ看板掲げて絵に描いた餅にするのではなく、実態として実現できるものとして、世間とコミュニケーションしていく努力といったことも必要だし、中学校側も指導上、中学生が、スクールミッションが個別化されて特色が出ていると知る機会という意味で、キャリア教育と言うか、職業教育でも進路指導でもない形で、きちんとここが何を狙っているのかということや学ばなければならないし、そのための指導もしなければいけないと思う。特に中学校の多感な時期の子たちに対して、自己認識とか、自己理解といったことを押して高校にマッチングする選択をしてもらうように促せるという指導も今後は中学校側にも必要なのではないかと感じている。
- ・最後になるが、私自身気になっていた点があり、前回も今回も私から学校の先生の負担といったところを指摘させていただいたのだが、一方で生徒目線が若干少なかったという反省があった。例えば、在籍している高校生がいるのだが、今の入試制度でどのようなことが起こっているかをきちんと把握した上で、入試の実施時期を検討するということも必要かなと思った。特に先生自身は国公立大学の試験対策の忙しさ、指導上の忙しさは、多分2月頭ぐらいで終わるのではないかなと思いつつも、当事者の3年生、受験生で国公立大学の後期入試を受験する場合には、面接指導や小論文指導を受けたい時期もあると思う。こういった時期に高校入試の関係で登校禁止期間と被り、指導を受けることができないというようなことがあったりすると嫌だなというのが、私の中の意見としてあり、そういったところも検討しつつ、高校入試の実施時期を見極めるといったことが大事。そういった生徒目線での情報といったものも踏まえて検討できるといいと思ったので、今後教えていただきたい。私からは以上。

<大継委員>

- ・事務局より丁寧に資料を作成いただき、またご説明もいただき、感謝申し上げます。
- ・前回の審議会において、大阪府においての高校の特色を進めてきた計画、それから高校選抜制度の改編の歴史などについてご説明をいただき、その際に申しあげたが、大阪府において

私立高校の授業無償化の動きや、7対3であった公私間比率の撤廃、もう10年ほど前になると思うが、絶対評価を導入し、そのための評価の客観性をどのように担保するか、あわせて学校現場の負担をどれだけ少なくするか、そういう観点から、大阪府全域でチャレンジテストを導入されて、様々な工夫をされながら、大阪府の施策や、府民、生徒の意識の変化などに柔軟に対応されてこられた、このように再認識させていただいた次第。

- ・本日説明いただいた内容であるが、資料の3ページに「新しい学習指導要領の示す方向性」として掲げられている「この中で何を学ぶのか」「どのように学ぶのか」「何ができるようになるのか」という組み立ての中で、新しい時代に必要となる資質であったり、能力を育成したりするということが示されている。また冒頭にあったが、国からは「各高等学校に期待される社会的役割の再定義」として、それぞれ高等学校が、改めて自校の存在意義や、めざすべき方向性を明確にして、外へ示していくことが必要であるということが示されていた。これらは非常に大きな動きであるが、こういうことを踏まえて、高等学校の選抜制度の改編を検討していかなければならないと思っている。
- ・選抜制度の改編については様々なご意見もあり、また判断も非常に難しいところであるが、前回も申し上げたように、方針としては、15歳の受験生に入試に対して、できる限り過度な冒険をさせずに、入学後も意欲をもって学び続けることができる。また、学ぶ中で新たな自らの個性能力を発見して、それを伸ばそうとするような入試制度や高校教育の改革に取り組むことにより、よりよいマッチングをめざすことができるのかなと思う。
- ・高校進学率が98%を超える状況が続いているが、受験者数が減少する中においても、高校で今回、不合格者が増加をしているということは、これは何としても取り組んでいかなければならない課題じゃないかなと思っている。
- ・本日まで説明いただいた他府県の状況について、他の委員の方の話にもあったが、広島県で「自己表現」というプレゼンテーション試験を実施しているという説明であったが、受験生にとっても、負担のかかる試験と思った。「自己認識し、自分の人生を選択し、表現することができる力」を見るために、受験生全員に実施しているという説明であったが、これについては評価をしていく方法や、受験生自身の負担ということを考えていくと様々な意見もあるのかなと思った。15歳の受験生が、進路選択をするにあたり、15年生きてきた自分の人生を振り返り、これから自分が生きていこうとする未来を、自らがしっかり考えていく、こういう思考は重要なことではないかなと思う。私は中学校の教員もしていたので、進路指導・進路学習は生きるための学習であり、自らの人生をしっかり考えていくことが必要であると、過去の経験の中では感じた。中学校から高校へ進むに当たり、受験という大きな壁というものがいわゆる子どもたちの学びの連続性というものを、打ち切るということではなく、学びの連続性を確保して、できるだけ円滑に高校生活に結びつけていくことができたら望ましいのではないかなと思っている。これまでの自分の学びであったり、家庭の問題であったり、生活を振り返るにあたって、自分の存在を意識すると、そして未来の学びに意欲をもっていくということ、いわゆるその受験というものが、大きな壁ではなく、教育活動・学びの活動という位置づけになっていければと思います。そのためには今もされていることだが、中学校側の方の受験指導・学習指導も一層指導していただくという協力も必要になってくると思う。

- ・また高等学校側においては、いろいろ外への情報発信ということで、外部へのスクールポリシーなどをしっかりと発信をして、受け取ってもらうという仕組みが必要。過去に工業高校、商業高校について議論したとき、受験者数をどのように増やすかということを中心に議論したことがあったが、その中で受験者や保護者だけではなく、中学校の教員の多くが普通科高校出身の先生方が多いために、工業高校や商業高校の実態を本当に理解していない、わからないというようなことがあり、難しい、大きなハードルを感じた。作業もお金もかかることになるかもしれないが、中学生のキャリア教育の充実に繋がるということも含め、中学校側に適切にその情報が伝わる、また高校側が発信できる、このような配慮が一層できればいいと思う。
- ・最後に選抜制度の負担の問題については、負担感が大きくなるとミスも多くなるということを私も経験した。やはり負担軽減が大前提であると思うが、高校側の特色を有効に生かすということであれば、一定枠の推薦入学ということも考えられるのかなと思う。例えば、定員の40%を現在の特別選抜日程で実施をし、自己表現と面接、中学校側からの評価で実施していくということも一つの考えではあると思う。これを実行するには、高校側の負担を考えると、不安があるし、制度設計をしていくということも大変難しいところがあるので、現段階としましては、課題が多く、一層の検討が必要だと思う。
- ・これらが難しいとしても、それぞれの高校の判断で、面接を実施していったり、採点の傾斜をかけることができたりしていくとか、または独自に工夫できるようなそのような裁量を一層確保していく、そんなことができないかなと思った。

<川田委員>

- ・愛知県と広島県の例を出していただいて非常に興味深かった。愛知県の各学校・学科の強みや特色を出す選抜は、これからどうやって各学校が生き残っていくかという観点で非常に重要なポイント。全部でなくて、一部のクラスでもいいからそういった特色選抜を取り入れることが重要では。この取組みを進めると、各学校が特色や魅力を競うようになり、全体的な底上げができてくると思う。今、単純に進学実績だけで高校を選ぶという風潮もあるが、そういう流れに対して、生徒に本当に合った教育、その特色・魅力を打ち出せるのであれば一つの打開策になる。
- ・アドミッションポリシーは文字がずらっと並んでいるだけで非常にわかりにくく、どの程度読まれて理解されているか不明だが、今度は特色をスクールミッションとして打ち出すのであれば、中学生にもわかる平易な文章で特徴を示すことが重要だ。また、私学に比べたらやはり公立の学校のホームページは非常に見づらく、わかりにくいものが多いので、その辺りも改善していく必要があるのではないかな。
- ・大阪府では自己申告書として活動の記録の提出を課しているが、15年の人生でこれまで何をやってきたかを表現するだけでは不十分で、自己表現として、その方向に進みたいという強い意欲を表明する機会にすることも非常に重要だと思う。ただし、先ほどからのお話にもあるように審査側の主観や審査する手間が問題だが、こういう意欲を示す場はやはり必要ではないかな。
- ・愛知県の選抜では全てマーク方式だが、答えが一つの問題ならよいが、記述式の部分は残していく必要がある、文章力のテストは絶対必要。

- ・普通科高校を志願する場合、まだ文理分けもしていない中で、将来について具体的なイメージを述べよと言ってもかなり難しいと感じる生徒が多いただろうが、早くからこの問題について考える機会をきちんと作っておくことは、大継委員もおっしゃったように、最初のキャリア教育として非常に有益ではないか。
- ・実業高校を志願する場合、就職志望なら就職で、その先の自分の将来の人生も含めて、選抜を受ける必要があるため、相対的に明確な将来の展望や志が固まっている。そういうものを試すには面接試験や自己表現が必要。実業系の学校では、志の実現のために、自己表現と最低限のスキルを見極める必要がある。私の経験では、志を持って志望先を決めたということは非常に重要だ。教員時代に研究室を運営していたときに、想定より多くの工業・工科高校の卒業生が大学院に入ってきた。入学直後に学力確認テストとして数学や物理を毎年同じ問題で、かなりの問題数を課しているが、工科高校から来た学生は下位 20%に固まる。そのような状況でなぜ大学院まで行けたのか、学部卒で就職する気持ちを変えたのかを調べてみた。普通科高校から来て何となく機械科に入った学生よりも、何か目的意識を持って入ってきている工科高校の学生のほうが4年間ですぐ成長する。目的意識がはっきりしているから、最初に足りなかった学力を一生懸命勉強して補って、最終的に4年時には工科高校の学生がかなり上位層に多く含まれ、彼らが大学院に進学することがデータでわかった。やはり志が重要だと思う。
- ・選抜で志、意欲を見るのは大切だと思う。はっきりした目的を持つ学生は、必要とされる学問を「これがなければわからない」と勉強している。
- ・3点めとして、愛知県と大阪府の入学選抜の日程を比べると、愛知県は特色選抜が2月6日、一般選抜が2月22日と、大阪府に比べて約2～3週間先行している。卒業式のときに進学先が決まってないことが前回に議論になったが、愛知県はなぜこの日程で出来るのかという観点も含めて、今の大阪の問題に対する答えがそこにあるのではと思う。現在私学の選抜は2月上旬、公立の一般選抜が3月上旬だが、公立が苦戦している中ではやはり選抜のスケジュールを考えることも一つの案だと思う。

<小田委員>

- ・おまとめいただき感謝。今までのご意見と重なるは当然あると思いますが、3つの観点で話させていたいただきたいと思っている。
- ・高校生を見ても大学生を見ても、「早く決めたい」「確実に決めたい」「試験の内容はできるだけ簡素で」という点は同じで、大学に入ってからいろいろ進路を考えようという点もあり、非常に難しさもあるが、各校の個々の強みを生かしていくことは非常に大事だと思う。ただ一方で、生徒自身が自分の強みを知っているかどうかといえ、私も教育相談でいろいろと関わる際に「あなたの強み、ストロングポイントは？」と聞くと、「特にありません」が多い。苦手なところはいっぱい挙げるのだが、自分の強みを自己理解できてない生徒が、高校の強みとマッチングするのはなかなか難しいのではないかと。そういう意味では、小中高で自分の強みをしっかりと自己理解していけるように、キャリア教育の一環になるかもしれないが、強みを理解していく取組みを大切にしていけることによって、高校の強みと自分の強みをマッチングできるかどうかにつなげていくことが大事だと思う。そういった意味で、生徒自身の強みを教育することによって、高校の強み・特色とのマッチングが可能になる部分があると思う。

- ・2つめは、先ほどお伝えした引き継ぎについて、最終的に合格がわかった段階ではもう10日もないという状況で入学してくることに、いろいろ課題もある。支援を繋げていくという観点もあるが、うまくスムーズに適応していくために必要なことを伝えるという観点で、それほどでもないが少し気になる生徒に関しては確実に繋いでおくことは大事だ。例えば、一部の学生で、高校から大学に個別の教育支援計画が上がってくるが、そのような学生がほとんど問題なく過ごせるのは、しっかりと守られてきて、いろいろ繋がっていけるからだ。一方、ノーマークの学生が気になることがあり、そういった意味では高校でも狭間にいる子供たち、支援が必要か必要ないかという部分が、ある意味、後々不利益を起こす可能性があり、そうした意味での引き継ぎの期間が必要だと思う。そのためには、中学校との連携が大事で、中学校から支援が必要かというよりも、スムーズに適応して学校生活を送るために必要な情報提供という観点での連携が大事だ。高校の改革や特色も、中学校の教員が理解していくことが改革の中では大事な視点になるのではと思う。
- ・3つめは少し違う視点かもしれないが、更なる特色という観点で高校を見ると、地理的な条件によって生徒が進学を躊躇してしまうところが見受けられる。「交通の便が不便だから」と地理的な条件が影響するため、少し遠くても行きたいという特色を出していかなければ、中央部に寄っていく傾向があると思う。一律に特色を求めるだけでなく、地理的な条件をどのようにカバーしていくかも大きな課題ではないか。

<浅野会長>

- ・皆さんから、いろいろな観点からご意見をまとめていただいて、よくわかってきた。
- ・私からは3点意見がある。まずは、マッチングとはなにか。大学の総合型選抜はまさにマッチングであるが、今の高校入試は単独選抜であり、とにかく自分で選んでいる。マッチングにもレベルがあって、わかりやすいマッチングとしては、工業高校・商業高校などの専門高校。ほかに進学校も自分の学力に合う。特色を考えた場合、英語科など見える特色のある学校は選びやすいが、「雰囲気がいい」「校風が好きだ」あるいは「面白い友人がいるらしい」といったマッチングはなかなか見つけにくい。マッチングのレベルもいくつかあるので、特色選抜として、レベルをすべてに広げるのではなく、このレベルまで特色選抜で見ようとするべき。
- ・その根本にあるのがスクールミッション、スクールポリシー。皆さんもよく意見いただいたが、校名を隠すとどこの高校かわからないほど同じような感じ。そういう意味で、ポリシーやミッションはマッチングの材料にはなり得ない。特色化のポイントにするには、もっと細かくして、本当のことを書く必要がある。本当は学び直しの学校だとしても、そうは書かない。そう考えると、スクールポリシーあるいはスクールミッションは特色選抜の根本にあるが、必要性はあまりないような気がする。この特色のレベルを考えるのが1点めの意見。
- ・2点めとして、今、受験生の視点、高校の視点で検討しているが、中学校の視点もある。確かに早めに安心できるのはいいが、高校でも大学進学が早くなって、例えば推薦入試が秋頃に決まるので、高校3年といっても2年半しか勉強していない。中学校も選抜がどんどん早くなって、3年間勉強しないで2.8年になっている。大学も同じで、就職が早く決まるので3年で終わってしまう。そう考えると、中学3年、高校3年、大学4年の勉強期間がトータルで2年は短くなったと感じるが、これが果たしていいのか、問題提起をしたい。いたずらに早くするの

は何か問題があるような気がする。そもそも、試験は2つのニーズがあり、これだけのことを学ぶというゴールを示すことと、試験があるから勉強するという2つ。あとは、それを持って選抜という確認があるといった、元々の学びの中での位置づけがある。

・3点めは、複数志願について。兵庫県でも学区ごとに複数志願を行っているが、学校が寄って採点基準をすり合わせる。大阪は府内全域での選抜なので、採点基準のすり合わせができないとなると、愛知県のようにマークシートしかない。マークシートはその方法の一つであって、省力化のためではなく、複数志願にするとそうせざるを得ない。

・最後に要望だが、ぜひ次回以降のヒアリングの中でもお伺いしたいし、教育庁で状況をつかんでいけば教えていただきたいのだが、推薦入試で入学した生徒が伸びているか。データはないかもしれないが、エピソードでもよいので知りたい。そこから何かがわかるのではないか。

・いずれにしても、今頑張って検討しているが、正解はなく最適解もないので、満足解のような「これだとマシだろう」「それだと今よりも良くなる」「これだと子どもたちのためや、中学校や高校のためになる」といった方法を、ぜひ着地点として見つけていきたい。

○浅野会長より、今回の意見を踏まえ、継続審議できるよう事務局での準備を指示。

(3) 閉会

- 事務局より、次回開催は5月23日（木）となる旨、連絡。
- 閉会